

現代イスラーム社会としてのパキスタン

—社会的矛盾と文化の共有化を巡って—

平成 20 年度入学

参加したフィールドスクール：ネパールフィールドスクール

調査地（調査国）：パキスタン

須永 恵美子

キーワード：パキスタン、インド、ウルドゥー語、ヒンディー語、文化

自分の研究テーマについて

報告者の研究の目的は、パキスタン社会を理解するために、その歴史的変容に最も深くかかわっているイスラームに焦点を当て、文化および社会思想を明らかにすることである。

パキスタンの総人口は 1 億 6 千万人を超え、世界で 2 番目に大きなムスリム国家である。この国は、1947 年のインド・パキスタン分離独立で成立した国と一般に考えられている。しかし、実際には長い歴史の変遷と建国後のさまざまな国民形成の努力と試行によって、その内実が形成されてきた。独立運動で全インド・ムスリム連盟を先導した「建国の父」ムハンマド・アリー・ジンナーは、1940 年に「Two-Nation Theory（ムスリム・ヒンドゥー二民族論）」を唱えた。これは、南アジアのムスリムをひとつのネイションとみなす点で、根源的な矛盾を内包している。そのためパキスタンは、近代的な国民国家にもイスラーム国家にもなりきれない社会的構造を有していると言われてきた。しかしながら、そもそもこの評価は西洋的な近代国家を前提とした見方であり、アジアやアフリカ固有の地域的な伝統を計ることに限界が生じる。むしろ、西洋的な価値判断から脱却し、パキスタン社会を正面からとらえなければならぬ。すなわち、パキスタンのイスラームの社会的実態や、パキスタン人の歴史認識を研究することが必要である。

フィールドスクールから得られた知見について

パキスタンが隣国インドからの多大な影響を受けているように、ネパールにおいてもさまざまな局面で「インド」を発見できた。テレビをつけるとインドの番組が流れており、映画館ではヒンディー語のインド映画が上映され、街中に溢れている生活用品はインドからの輸入品が多かった。報告者の話すヒンディー語はホテル、研究者、レストランの店主など、あらゆる場面で通用した。特にカトマンズ市内ではヒンディー語の流通度が高く、これには衛星放送を通じたメディアの影響と、インドへの出



ネパール・中国国境の出入国オフィスの看板

稼ぎ労働が関係すると思われる（報告者の研究地であるパキスタンでは、インドへの出稼ぎは制度上非常に困難である。メディアという「モノ」を通じた影響と、実際の人の移動を伴う影響力の違いに関しては、今後の調査課題としたい。

反対に、テレビが普及していない農村地域ではヒンディー語はほとんど通用しなかった。特に、今回訪れたピンタリ村では、英語やヒンディー語はおろか、ネパールの国語であるネパール語を話せない人もおり、言語状況は首都と明らかに異なっていた。報告者もホームステイ先の家族と満足なコミュニケーションをとることが出来ず、もどかしさを覚えた。

南アジアにおけるインド（ヒンディー語）の影響力、もしくは中心性と表現される社会的な構造は、書籍等を通じて知っていた知識ではあったが、フィールドスクールでその現実を目の当たりにすることにより、経験を伴う理解となった。



ピンタリ村で行なわれた地元の人との会合。やりとりはすべて通訳を通して伝達される

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

上述の通り、報告者はフィールドスクールを通して南アジアの「ヒンディー語/ウルドゥー語/ヒンドゥスターニー語」文化圏に含まれながらも、インドの「周縁」と位置づけられているネパールとパキスタン両国の実証的な比較を行った。

また、フィールドスクールに続いて行なったパキスタンの現地調査では、予備論執筆のための資料収集を行った。国内の出版業界が集中するラホールのウルドゥーバザールを中心に、書店や大学の図書館を連日訪れた。特に、イスラーム文化研究所では、理事であるカーギー・ジャヴェード氏にお会いし、イスラーム急進派、資本主義、共産主義といった当時の主潮に関するレクチャーをいただいた。同機関は1950年代から『文化』『知識』という雑誌を刊行しており、既に絶版となっているオリジナルプリントも入手することが出来た。

いずれも、パキスタンという社会を理解するうえでの貴重な体験/資料になるとと思われる。



ネパール（カトマンズ市内）で見つけたウルドゥー語
左：ウルスの集会の案内
右：眼鏡屋で見つけた視力検査の機材。
ヒンディー語、英語、ロシア語のアルファベットもある